大東文化大学　博士学位論文審査報告書

氏　　名	陳　偲佐
学位の種類	博士（書道学）
学位記番号	甲第167号
学位授与年月日	2021年3月22日
審査研究科	文学研究科
論文題目	宋代古文の展開と応用 ―鐘鼎文・伝抄古文・小篆を中心に―
論文審査委員	（主査）大東文化大学教授　河内　利治 （副査）大東文化大学教授　澤田　雅弘 （副査）大東文化大学准教授　綿引　浩一 （副査）筑波大学名誉教授　中村　伸夫

博士学位申請論文審査報告書

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされております。ご了承ください。

1．論文の目次

まず目次に従って全体構成を概観する（図表など一部省略した箇所がある）。

序　章　一、研究目的と範囲

（一）研究目的

（二）研究範囲

1、宋代の篆書教育

2、宋代の古文に関する書物の出版

3、金石学の「金学」と「石学」

4、北宋における古文の応用―米芾の篆書を中心として

5、南宋における古文の応用―常杓の「盤谷序」を中心として

6、徽宗朝の礼器における古文の応用

二、研究方法

（一）伝来文献、文物と出土文物を総合的に実証する方法（「二重証拠法」）

（二）古文の分類方法

1、伝抄古文と鐘鼎文とを分類する理由

2、文字構造による比較方法

（1）書籍の使用　（2）字体を区別する基準

（三）専用名詞の定義方法

1、古文とは　2、鐘鼎文と金文の区別

（四）オンラインデータベースの資料収集方法

1、小学、字書類　2、文献類　3、図版類　4、辞書類

三、先行研究

（一）論文、著書　1、金石学類　2、文字学類

（二）文献（清代）

四、論文構成

第一章　宋代における篆書発展の背景について
はじめに
第一節　識字と篆書の教育
一、小学と文字学　（一）官学　（二）私学
二、書学　（一）書の技術官僚の育成　（二）社会における篆書の教育
第二節　字書の流布
一、「説文」類　二、「伝抄古文」類　三、「鐘鼎文」類
第三節　小結
第二章　北宋における古文の応用―米芾の篆書を中心として
はじめに
第一節　米芾が実見することができた篆書資料のテキスト（版本）とその様式
一、士人達が収蔵した古代器物の銘文
二、内府に収蔵された器物と銘文
三、宋人の書跡
四、字書の運用
第二節 米芾の篆籀に対する理解と創作
一、『紹興米帖・米芾篆隷巻九』
二、『御製文宣王贊碑』
第三節　小結
表１　『紹興米帖・米芾篆隷巻九』疑字表（１４字）
表２　『紹興米帖・米芾篆隷巻九』慣用部首字表（１０部首）
表３　『紹興米帖・米芾篆隷巻九』混写字表（４字）
表４　『紹興米帖・米芾篆隷巻九』合文字表（２字）
表５　『紹興米帖・米芾篆隷巻九』字例（７３字）
表３　『文宣王贊碑』米芾字例（２４字）
第三章　南宋における古文の応用―常杓の「盤谷序」を中心として
はじめに
第一節　常杓の作品について
第二節　「盤谷序」にある古文の実相
第三節　常杓の盤谷序とその時代
第四節　小結
総表　（全２０３字）
表１　『説文解字』のみに属す文字（１０字）
表２　鐘鼎文のみに属す文字（４５字）
表３　伝抄古文のみに属す文字（６０字）
表４　出典不明の文字（８字）
第四章　徽宗朝の礼器銘文について
はじめに
第一節　礼器製作の背景
一、金石学の勃興
二、北宋礼制の構築と礼器
第二節　徽宗朝の礼器銘文製作
一、礼器製作者の翟汝文とその礼器
二、礼器にある古文の実相
表１　徽宗の礼器鋳造に関する年号・事項対照表
表２　徽宗朝の器名・銘文内容・鋳成時期・出典表（全１７器）
表３　徽宗朝の器銘慣用字表（慣用字表）（全５７字）
第三節　小結
終　章
図版出典一覧
参考文献

２．論文の要旨および特色

（要旨）

宋代の古文に関する先行研究は、北宋の金石古器の伝来や、古文字の訓詁を考証することを巡って論じており、そのため個人の作品に使用する古文を対象とする研究は殆ど着手されていない。よって本論文は、宋代士人たちの古文の運用、古器物・銘文製作の理解、篆書に対する審美意識について詳細に研究することを目的とする。

第一章「宋代における篆書発展の背景について」では、宋代の識字と篆書の教育から論じ、官学、私学の識字教育と各学校における篆書の位置を考察し、併せて王安石『字説』が士人たちの訓詁に与えた影響を論じる。また書学について、技術官僚の育成と社会における篆書教育とに分けて論じる。そして、宋代士人たちの使用する参考書として、伝来した字書と金石著作を編集する経緯を考察する。

第二章「北宋における古文の応用―米芾の篆書を中心として」では、北宋の古文実作の一例として、米芾を中心に論じる。米芾が実見可能であった古文資料を考察することにより、彼の古文に関する環境と視野を明らかにする。そして、彼の作品『御製文宣王贊碑』と『紹興米帖』篆隷第九の文字構造の分析を通して、当時の古文の受容状況と彼の篆書に関する見解とを照合して考察する。

第三章「南宋における古文の応用―常杓の「盤谷序」を中心として」では、南宋の古文実作の一例として、常杓を中心に論じる。「盤谷序」全編の文字構造を分析し、文字の出典を明らかにする。さらに彼の古文を使用する習慣をまとめ、北宋人が古文で創作する観点と比較考察する。

第四章「徽宗朝の礼器銘文について」では、鐘鼎文の集成の高峰とみなせる徽宗朝は、北宋の鐘鼎文の短篇創作（款識や四字熟語）から南宋の長編へと発展する上で重要な転換期であるが、この時期に三代の礼器を模倣して製作した背景と、礼器銘文にある古文を考察する。

（特色）

北宋から南宋にかけて古文がどのように展開し、どのように応用されたか、各章で考察した結果を、特色としてまとめてみたい。

第一章では、「識字と篆書の教育」と「字書の流布」を考察した。宋代において、官立、私立学校の興学に沿って、唐代の士族教育から庶民教育に転換し、識字率や士人の数が激増した。この背景が、後の文字研究に重要な基盤を提供した。官立、私立学校における教育の内容では、篆書についての記録が稀ではあるが、神宗は文字学の衰退に留意し、王安石の『字説』を用いて科挙の試験用として流布させた。『字説』にある訓詁には無理にこじつけた解釈が多く、批判を浴びたものの、訓詁の気風を引き起こし、当時の士人たちに文字学を啓発した。徽宗の時代に設置した「書学」、「書芸局」は断続的に存在したが、教育する文字は古文（伝抄古文、鐘鼎文）を幅広く編入した。一方、拓本を作る技術の普及に沿って、法帖、歴代の石刻、鐘鼎文が広く流布し、様々な篆書の芸術風格が見られるようになった。印刷技術の発達に沿って、さらに字書が広く流布し、文字学の学習や篆書を調べることが便利になった。これらは以前の時代に比べ、宋代における篆書学習の優位であると考えられると論述した。

第二章では、「米芾が実見することができた篆書資料のテキスト（版本）とその様式」と「米芾の篆籀に対する理解と創作」について考察した。

米芾は宋代における金石学の風潮に啓発され、学書過程における篆書に対する理解は、当時出土した「詛楚文」と唐代から伝わる先秦の「石鼓文」、さらに当時出土した鐘鼎文から得たものが大きいといえる。そしてその書は、『御製文宣王贊碑』が、李陽冰の玉筋篆の書風であり、『紹興米帖』篆隷第九の古文が、竹簡のように行書の書風であるのを見る限りではあるが、細く硬い線質を好む傾向があるのではないかと推定した。

篆書作品の文字構造については、次の２点を指摘した。

１、隷書の結構に篆書の部首を結合して篆字を作ることが見られる点

２、来歴不明な疑わしい篆字（疑字）がある点

しかし、『紹興米帖』全８６４字中、鐘鼎文特有の文字構造で書いた文字が１８字あり、鐘鼎文を集字して四字熟語を書いていることなどから考えると、米芾は『説文解字』、伝抄古文、そして当時新たに出土し整理された鐘鼎文の資料を正確に使用できていると考えられる。加えて訓詁学に対する相当な理解があることから、字形の解釈や通仮字の使用も理にかない、なおかつ鐘鼎文や印文に特有な合文形式を運用して、自分の姓名「米芾」に当てはめていることは、当時においては稀有の用例であると言ってよいであろう。これらのことは、米芾が宋代の金石学や文字学の盛んな風潮に啓発され研究した証しであると論述した。

第三章では、「常杓の作品について」、「『盤谷序』にある古文の実相」、「常杓の盤谷序とその時代」について考察した。鐘鼎文作品であると自称した常杓の「盤谷序」の字形を古文と比較考察した結果、伝抄古文を使用する要因には以下の三つの場合があることが判明した。

一、鐘鼎文がない場合

二、鐘鼎文はあるが文字構造が小篆に近い場合

三、鐘鼎文はあるが重出する場合

さらに、南宋の鐘鼎文の作品と墓誌銘の記録を照合すると、

１、鐘鼎文の作品には伝抄古文と鐘鼎文を混用する点

２、墓誌銘の記録にある見分けにくい字を選ぶ点

３、小篆で古文の闕字を補う点

という三つの共通点があることを発見した。この考察結果は、古文に関する著作の内容と成書の経緯、ならびに当時使用できた書物を明らかにした上での研究であるので、「盤谷序」はほんの一例に過ぎないが、管見の及ぶ範囲での見解である。

そしてこの見解を踏まえ、宋代士人の文字学に対する観点を論述した。

まず唐代から宋代の篆書の作風は、李斯と李陽冰の影響下にあることが挙げられる。「盤谷序」にある鉄線篆の風格と款識を論じた皇帝の収蔵事情が何よりもその証左である。

次に常杓が款識に言う通り、鐘鼎文を用いて書く意識があったことである。多くの字がありのままに書かれ、判断できない字は少ない。全２０３字中、鐘鼎文の字形と一致する文字が１０６字、鐘鼎文特有の文字構造で書いたのが４５字である。宋代に、鐘鼎文の文字認識によってのみ宋詞を書くには限界があるはずだが、彼は広く流布した伝抄古文を用いることができた。この書作の意識は、当時の士人には、古文は通用できる字体であるという観点を持っていたことと関わっているとよう。

第四章では、「礼器製作の背景」と「徽宗朝の礼器銘文製作」について考察した。宋初において、徐鉉が史館に収蔵された器物銘文の釈出をはじめ、咸平三年（1000）に、乾州から献上された古鼎の考証や、仁宗皇祐三年（1051）初の金石図釈の著作『皇祐三館古器図』を編纂することや、字書の『古文四声韻』を編纂することが皇帝の収蔵と関わる。欧陽脩『集古録』に至り、初めて「証経補史」を目的とし、礼器銘文の研究を通して経学（礼制）、文字学（小学）、史学の三綱をたてている。劉敞と欧陽脩が積極的に器物銘文を収集し、楊南仲が銘文を釈読する成果に恵まれ、宋代の古文字学の勃興をもたらしたと考えられる。

器物と鐘鼎文の図釈著作について、李公麟の『李氏古器図』（考古図）は元豊年間（1078）から流行している。その後、元祐七年（1092）呂大臨『考古図』が跡を継ぎ、収蔵家３８人の所持する銅器２２４件、石器１件、玉器１３件を収録し、さらに、『考古図釈文』という鐘鼎文字書を編集した。四百余りの字首が釈出され、合計８２１字を集めている。この本は初めての文字学著作と考えられる。以後の王楚『鐘鼎篆韻』の一連の鐘鼎文字書に影響を及ぼした。徽宗朝に至り、「制礼作楽」の手本を作るため、古器大集成の『重修宣和博古図』を成書した。これに基づいて、王楚『鐘鼎篆韻』では主文の字数１０４２字、総６６４８字が釈

出された。南宋に入り、士人たちは新出土の器物を入手することが難しくなり、器物の研究が衰え、新たな器物の図象を編集する書物は稀である。この時の金石学は北宋末の「図釈の学」から「款識の学」に転換し、鐘鼎文の研究は再び民間で発展する。薛尚功『歴代鐘鼎彝器款識法帖』、王俅『嘯堂集古録』、王厚之『復斎鐘鼎款識』はこの時期の代表作である。

徽宗朝の祭事は多く道教活動と関連する。太廟を建て九鼎を作るのは、周代天子の九鼎の制度を援用し、三代に君臨した威儀を再現するものである。実はこの制度は方士の魏漢津の意見を受け、三代を追いかける名に乗じた、道教の祭事に関連したものであることが判明した。礼器製作者の一人、翟汝文の製作観を考察すると、礼制（器種、器制を含む）、文字、文体のいずれもが、三代の古典を再現する意識があることが判明した。

徽宗朝における礼器銘文の製作については、以下の通り古文を使用する特徴が判明した。

1、少数の磨滅した字を除き、半分以上は鐘鼎文の字形と一致し、文字構造が他の分類と類似する場合は美的風格が鐘鼎文に近づく傾向があること。この傾向は製作者の一人翟汝文がいう、「六経を考察して校正する上で、礼制を夏商の器物を用いて考察し、文字を青銅器に拠って校正し、誤謬の文字を刪除し、消失散逸の文字を捜訪した。六経の器物（尊、罍、犧、象）の用途、六書の文字（象形、科斗）の書法を明らかに輝かせ、六経と表裏の関係にあることを後世に教えるのである」と一致し、強く復古の意識があること。

２、特殊な字形は、宋代に新たに解釈した文字を使っていること。例えば、寅、以、貫などの字は宋代に釈出した孤例である。

３、宋代に流布していた「石鼓文」、「詛楚文」や伝抄古文を時に混用し、古文では対応できない字は小篆を用いたこと。このような書作意識は、当時の士人には古文が通用できる字体であるという観点と関わっている。

結章では、本研究を総括した。小篆と伝抄古文と鐘鼎文の流布した時間と出典が異なることから、この三つに篆書を分けて文字構造を分析し考察した結果、次の三点のことが判明した。

1、宋人は鐘鼎文と伝抄古文が同源であると言う概念に基づいて、鐘鼎文の作品や器銘を作る際、伝抄古文を転用することがあり、なおかつ古文が秦以後の文章にある全ての文字に対応できないため、小篆を用いて補っていることが判明した。

２、米芾は古文に対して多方面な理解があることが判明した。『紹興米帖』の篆書８６４字は、小篆、伝抄古文、来歴不明な疑わしい疑字で書かれており、鐘鼎文特有の文字構造で書いた字例はわずかに１８字であること（約２％）、また鐘鼎文を集字して四字熟語を書いたことが判明した。それに対し、南宋の常杓「盤谷序」の篆書２０３字は、鐘鼎文特有の文字構造で書いた字例は４５字に達した（約２２％）。これは、北宋徽宗と南宋高宗の両朝に金石活動がブームになり、様々な字書、金石著作が備わるようになったことを意味している。釈出した鐘鼎文が増え、文字学の学習や篆書を調べることが便利になり、長編の文章を書けるようになったことが判明した。

3、字書、金石著作の成書経緯と編集内容を明らかにすると、鐘鼎文の使用によって篆書作品の時代を判断することができる。例えば、徐鉉「千字文」には鐘鼎文特有の環「 」、呂大臨が釈出した射「 」があることから、決して宋初の作品ではなく、元祐七年（1092）以後の偽作であることが判明した。

これらの字書、金石著作と士人たちの受容の詳細にはまだ不明な点が多いが、収蔵、研究の流行に沿って編集された書物が、両宋の古文創作に大きな影響を及ぼしたことは明らかである。徽宗朝において釈出した鐘鼎文が激増したのは、技術官僚を育成する書芸所の科目に古文と大篆を編入し、鐘鼎文の地位が確立されたからである。これは官学としては初の試みである。その後、南宋の文献に鐘鼎文を自称した長編の千字文や墓誌銘が記録されていることは、古文創作の歴史上、重要な発展であると言えよう。

最後に、本研究は宋代における作者が判明した古文作品を中心に考察を行ったが、今後は

この研究方法を基盤として、宋代の古文を使用した印章を分析し、その印文にある特徴と時期を明らかにすること、さらになぜ鐘鼎文を用いて創作することが少ないかの原因究明などを課題として、引き続き研究を進めていく。

３．論文の審査内容

各章の審査内容を簡潔に記述する。

序章

本論文でいう宋代の「古文」は、「小篆以前の文字」であり、「伝抄古文（伝来）」と「鐘鼎文（新出土）」の２ジャンルがあると定義する。「伝抄古文」は「六国文字」、「鐘鼎文」は宋代新出土の青銅器銘文（「金文」は清人の呼称）であるとする。このようにどの呼称を用いるかは、研究の出発点として必要な手続きであるといえる。

これまで宋代の「古文」に関する研究は、北宋の金石古器の伝来や、訓詁や考証を巡って論じており、そのため個人の作品に使用する「古文」を対象とする研究は殆ど着手されていないことから、宋代士人たちの「古文」の運用、古器物・銘文製作の理解、篆書に対する審美意識について詳細に研究することを目的とする、とする。

王国維の「宋代には金石学が独立した学問として確立された」の言説を起点として、宋代の金石学と文字学の興隆と発展を交差させ、如何に「古文」が展開し応用されてきたかを論証する。そのため、１宋代の篆書教育、２宋代の古文に関する書物の出版、３金石学の金学と石学、４北宋における古文の応用（米芾）、５南宋における古文の応用（常杓）、６徽宗朝の礼器における古文の応用、との６つの「研究範囲」を提示し、前者３つが展開、後者３つが応用と位置づける。また日中の先行研究への行き届いた目配りと、文字構造の研究方法は的確であると認めうる。

第一章

宋代には、官立、私立学校の興学に沿って、唐代の士族教育から庶民教育に転換し、識字率や士人の数が激増し、この背景が後の文字研究に重要なベースを提供したと指摘する。官立、私立学校における教育の内容では、神宗が文字学の衰退に留意し、王安石の『字説』を用いて科挙の内容として流布させたと指摘する。現代からすれば『字説』の訓詁は無理な解釈が多く、批判を浴びたものの訓詁の気風を引き起こし、当時の士人たちに文字学を啓発したと考証した。徽宗の時代に設置した書学、書芸局は断続的に存在したが、教育の内容は古文（伝抄古文、鐘鼎文）を幅広く編入し、その一方で拓本を作る技術の普及により、法帖、歴代の石刻、鐘鼎文が広く流布し、様々な篆書の芸術風格が見られるようになったと指摘する。そして印刷技術の発達に沿って、字書が広く流布し、文字学の学習や篆書を調べることが便利になった。これらは前代に比べると、宋代における篆書学習の優位性であると考えられるとする。これらの指摘は、文献を読み解いた丁寧な記述である。

第二章

稿者は、宋四大家の一人、米芾の篆書作品に着目し、彼が書いた文字はどのような文字を使用したか、何を見て書いたか、そしてどのような美しさを持つ傾向があるかを解明しようと試みた。この試みが本研究全体を貫く視点になっている。そのため、現在見ることができる米芾の篆書作品『紹興米帖篆隷第九』（全７３字）と『御製文宣王贊碑』（全１５５字）の二書跡を、宋代鐘鼎文は『考古図釈文』と『鐘鼎字源』、伝抄古文は『古文四聲韻』と『汗簡』、小篆は『説文解字』に収載される文字を中心に、６つの表を作成して詳細に文字構造を分析した。その結果、学書過程において、当時出土した「詛楚文」と唐代から伝わる先秦の「石鼓文」、さらに当時出土した鐘鼎文から得たものが大きいことを指摘した。また書は、『紹興米帖』篆隷第九は竹簡のように行書の書風であり、『御製文宣王贊碑』は李陽冰の玉筋篆の書風であり、二書跡を見る限りではあるが細く硬い線質を好む傾向があると推定した。

加えて米芾が『說文解字』、伝抄古文、当時の新出土鐘鼎文の資料を正確に使用できていること、訓詁学の理解が十分あることを指摘し、このことは宋代の金石学や文字学の盛んな風潮に啓発され研究した証しであると論じた。よって本章は、米芾の篆書を初めて学術的に考察した論文として価値を有する。

第三章

第二章で北宋の書人米芾の篆書作品の文字構造を分析したことから、本章では南宋の士人常杓が書いた「盤谷序」の文字構造を、第二章同様に鐘鼎文、伝抄古文、小篆の字形と比較分析して各文字の出典を明らかにし、常杓がどのように古文を使用したかの実態を解明しようと試みた。その結果、全２０３字中、鐘鼎文の字形と一致する文字が１０６字、鐘鼎文特有の文字構造で書いた字が４５字あることから、常杓が鐘鼎文を意識して使用していること、また鐘鼎文・伝承古文・小篆の使い分けについては、通用できる概念に基づいて伝抄古文と鐘鼎文を混ぜ合わせて書く、見分けにくい特殊な字を選んで書く、古文で対応できない時は小篆で書く、という三つの場合があることを発見した。当時使用できた書物を明らかにした上での発見であるので、今後の南宋篆書の研究の上で重要な視点を提示した一章といえよう。さらに唐代から宋代の篆書の作風が李斯と李陽冰の影響下にあることを、「盤谷序」の鉄線篆の風格と款識を論じた皇帝の収蔵事情から論じた点も首肯できる。ただし「盤谷序」一例の研究に過ぎないことを注視しなければならないであろう。

第四章

本章は、北宋徽宗朝に古器が模倣して製造された背景とその要因を論じた。背景の記述は、宋初の徐鉉から説き起こし、仁宗朝の金石図釈『皇祐三館古器図』、字書『古文四声韻』、欧陽脩『集古録』へ、ついで李公麟『李氏古器図』、呂大臨『考古図』『考古図釈文』、そして徽宗朝の『重修宣和博古図』、王楚『鐘鼎篆韻』に至るまでの成書編纂の経緯は、北宋金石学史とも呼びうる内容になっている。金石学は北宋末の「図釈の学」から「款識の学」に転換し、鐘鼎文の研究は再び民間で発展し、薛尚功『歴代鐘鼎彝器款識法帖』、王俅『嘯堂集古録』、王厚之『復斎鐘鼎款識』がこの時期の代表作であると論じる。また要因として、徽宗朝の祭事が多く道教活動と関連すると指摘する。礼器製作について、作者の翟汝文の製作観を考察すると、礼制（器種、器制を含む）、文字、文体がいずれも三代の古典を再現する意識があるとの指摘は卓見であろう。

一方、宋代士人の文字構造を分析するため、崇寧・大観・政和・宣和年間（1101-1125）の徽宗皇帝の礼器鋳造に関する事項を文献資料から抽出して、全１７器の礼器を検出し得た。それを第二章と第三章と同様に鐘鼎文、伝抄古文、小篆、その他の字形と比較分析し、各文字の出典、銘文内容、鋳成時期、慣用字５９字を明らかにすることによって、従前の銘文釈読の誤りを指摘し訂正した。これも新たな知見の提示である。

結章

第一章から第四章まで論述し指摘した本論文を総括できている。

ただし、稿者自身が、字書、金石著作と士人たちの受容の詳細はまだ不明であるというように、両宋の収蔵、研究を伴って編集された書物と、古文を使用して創作する実態との関係をさらに解明することが望まれる。また、本論文は両宋中、北宋時代の研究に比重があり、南宋の文献には鐘鼎文を自称した長編の千字文や墓誌銘の記録があると言及するものの、さらに研究の余地を残している。この点も研究成果を望むものである。

総じて、書は、いつ、どこで、誰が、何のために、どのような文字を、どのように書くが問われる芸術である。今日、篆隷楷行草の五体が一般的に知られているが、そのなかの篆書は、一番古い書体であり字体であるがゆえに、いく通りもの字形がある。本研究は、宋代の古文（伝承古文と鐘鼎文）の字形を詳細に比較考察することによって、その実態を解明した稀有の論文である。本論文の最大の特色はここにあろう。

４．文学研究科「博士学位論文の評価基準」による論文の評価

1. 研究テーマの適切性

宋代の古文（伝承古文と鐘鼎文）がどのように展開し応用されてきたかを解明する、という明確な問題意識に基づく適切な研究テーマの設定である。

2. 研究方法の妥当性

古代の文物と歴史文献を照合する方法は極めて一般的な論証法であるが、本研究ではそれをより実証的に行なったといえる。入手困難な古器の形状や銘文および墨跡の高画質画像、ならびに学術論文や古代文字の検索エンジンを使用したことは、本論文のエビデンスとして最重要である。

3. 研究史への対応の適切性

古代文字の研究には中国・日本・台湾を含む膨大な先行研究があり、全てを渉猟したとはいえないが、研究テーマに関する先行研究の論点に立脚して、研究成果を当該分野の研究動向の中に位置づけながら文字学・金石学の研究史に対応しようとしている。

4．論旨の明確性・一貫性

各章ごとに多くの図表を用いて文字構造を分析し、歴史文献を解釈して引用し、多くの古文を丁寧に釈読しており、論旨の展開は明確であり、研究テーマに対応した結論が導かれている。よりマクロな視点から論じられれば、論旨はさらに一貫するであろう。

5. 構成・表現の適切性

日本語としての記述が不十分であり、微妙な表現や詳細な論述が不明瞭ではあるが、学術論文として適切に体系的に構成されている。

6. 学術的・社会的な貢献

学際的観点から見て、北宋・南宋時代の篆書の実態を、字例のビッグデータによって可視化した先駆的研究として十分な独創性があり、書道学に一石を投じうる考察結果を有している。

５．結論

2020 年 7 月 27 日に主査・副査担当予定者による、陳偲佐氏の博士学位申請論文予備審査委員会をオンラインで実施し、論文の提出が可能であると判断した。2020 年 12 月 3 日、博士学位申請論文審査委員会に論文審査を委嘱されてからも引き続き直接の指導を行い、2021 年 2 月 10 日に口述試験をオンラインで行った。各委員が本論文に対して質疑し、陳氏はそれらの質問に率直に誠実に回答した。全体を掌握するマクロな視点が若干不十分であるとの意見が出されたが、丁寧な字形考察による多くの新たな知見の指摘が評価され、審査委員会は口述試験を合格と判断した。

以上の審査内容および評価に基づき、本論文を審査の対象とする学位審査委員会は、陳偲佐氏が博士（書道学）学位を授与されるに適格であると全員一致で判断したことを茲に報告する。